

◆ことしの冬は厳しかったからか、作品も雪や寒波に触れたものが多く見られた。ときに、春が来て花は満開、虫が這い出し、鳥も鳴く。生きものが一齐に活動を始めることに力づけられている。

◆知人が昨年末に『農とアナキズム 三原容子論集』（虹霓社、二〇二四年十二月）を上梓した。カバー絵は、辻まこと。三原さんは二〇〇一年の東北公益文科大学開学と同時に京都から酒田に移り住み、現在も酒田市在住でさまざまな活動をおこなっている研究者である。さっそく読んでみよう、三原さんを知る人はそれぞれ山形県内の地元図書館にリクエストしようだ。そこで面白い現象が起きた。わたしの住んでいる町の図書館は、メールで「先日リクエストしていた図書に関して、検討の結果、購入することにいたしました」と丁寧に教えてくれた。ほかの町の図書館でもすぐに購入となったとのことだ。ところが、ある市の図書館では「専門的すぎる」ので購入を見合わせる、と電話でいつてきたらしい。図書館の対応もさまざまである。三原さんの本は難しい部分もあったが、解説を頼りに読み進めると、地図を片手に前進していく感じがした。

「静かなアナキズム」を知ったのは『生きるための読書』（津野海太郎著、新潮社、二〇二四年十二月）の書評を辻山良雄さん（本屋「書店」店主）が書いていたからである。引用する。

（上略）——いまはたくさんのことを知る秀才が、大学から自分の体ごと外の世界へ飛び出し、それぞれ独自の場を作る時代だが、それを面白がる津野さんには、ノスタルジーに溺れることのない、編集者としての嗅覚が垣間見える。

そうした津野さんの現役ぶりは、本書の後半で語られる「静かなアナキズム」の話題にも顕著だ。大きなシステムの力が強まる世界で、ブレイディみかこや栗原康、松村圭一郎などによる、これまでにはないタイプのアナキズム本が刊行されているいま、津野さんはかつて鶴見俊輔が唱えた「静かなアナキズム」という言葉に立ち返った。権力に対して暴力で訴えかけるのではなく、地域や友だちづきあいといった小さな集団に基づく自由な社会を目指すこと。もちろんそこには、現実に対する「きば」がなければならぬが、そうした社会が、そのまま大きなシステムに對してのカウンターとなるのだ。（中略）いま様々な分野で起きている、小さく・ローカルであろうとする動きにも関連することだと思う。

津野海太郎さんの本は面白かった。八十年代後半の津野さんは「もうじき死ぬ人」（自嘲することば）といいながら、読書によって今の時代を読み解いているのだ。すごいことである。

津野さんといえば、だいたい以前のことになるが、ある編集者学校の講座で何コマか教わったことがある。ヒットを飛ばしている晶文社の編集者であって、ひと言も聞き漏らすまいと必死だった。残念ながら劇団「黒テント」の演出家という津野さんのもう一つの顔に触れることはなかったが、存在感があつてギョロリと受講生を見るようすは印象的であった。

（布宮慈子）

# muninokai.com

113号より上記サイトのオンライン版発行のみとなっています。

季刊 展景  
117号

二〇二五年四月三十日 発行

編集・発行人 布宮慈子

制作 スタジオ・マージン

無二の会「展景」発行所

山形県西村山郡河北町谷地庚79

info@muninokai.com

Copyright © 2025 MUNINOKAI. All rights reserved.